

肛門の病気について

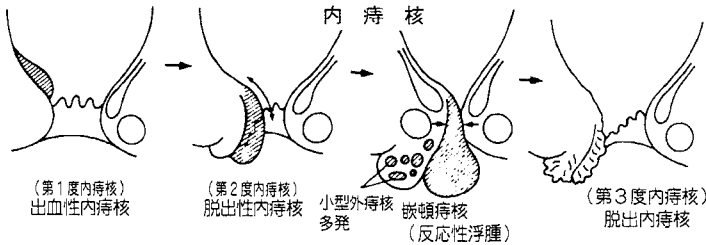
都留市立病院外科

紫藤 和久

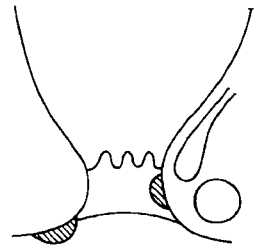
肛門の病気という少し抵抗のある方がいらっしゃるかもしれませんが、外科で扱う病気で頻度の高いもののひとつです。病気の性質上なかなか病院へ足を運ばず、一人で悩んでいたたり、民間療法等に頼り続けていたりすることも多いものです。今回は皆さんにこの病気についてある程度知っていただくと思い筆をとりました。

大きく分けて痔核（いぼ痔）、痔瘻・肛門周囲膿瘍、裂肛（きれ痔）の三つがあります。それぞれについて治療法等も含めておまかに触れてみたいと思います。

①痔核：この病気は肛門の静脈がうっ滞するためにおこり、人が立位で生活するようになって以来、宿命的にこれに悩まされるようになります。慢性便秘、下痢、長時間の起立や坐業、妊娠出産などがあると起こりやすくなります。またアルコールや香辛料の採りすぎで症状を悪くしてしまいます。大きく分けると外痔核と内痔核があり、できる場所・病態が違います。外痔核は外から見える場所にでき、単なる血のかたまりであることが多く、かなり痛みを伴いま

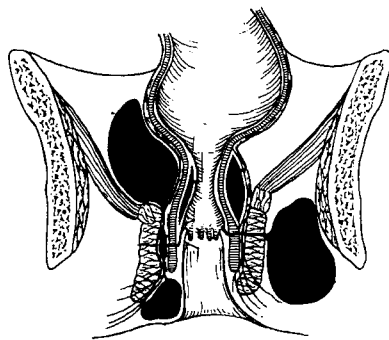


す。薬だけで治るものがほとんどで手術を必要とするものは多くありません。内痔核は便秘やいきみで肛門の血管にうっ血が生じ、静脈のこぶが作られることによって引き起こされます。早期のうちはあまり痛くありませんが、ひどくなるとこのこぶが肛門外へ脱出し（いわゆる脱肛）かなり痛くなります。ひどくならないようにするためには、次のような予防法が重要です。それは毎日風呂に入り肛門の血行をよくすること、快食排便を心がけてトイレでいきまないこと、香辛料やアルコールを控えることです。ひどくなっ



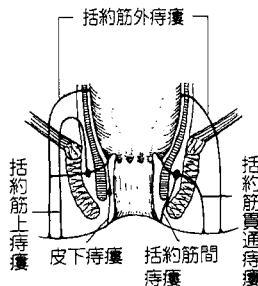
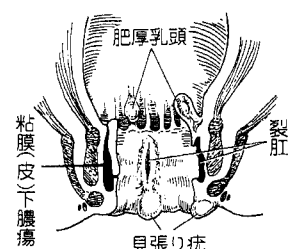
場合はまず薬による治療を行います。これで良くならない場合手術療法が必要になってきます。現在一般的に行われている方法はミリガンモルガン法というのですが、これはこぶへ流れ込む血流をなくした後こぶの部分を取り除くというやり方です。腰からの麻酔で行い短時間で終わります。手術後の痛みはそれほどなく、大体一週間以内には退院できます。この手術後に生活の制限を受けることはほとんどありません。

②痔瘻・肛門周囲膿瘍：肛門周囲膿瘍は肛門腺が細菌に侵されることにより生じる膿のたまりで、かなりの痛みを伴います。時により発熱も伴います。痔瘻は肛門周囲膿瘍に引き続いて生じるもので、膿が肛門、直腸などに及んで形成される細い道です。症状は膿がでて下着が汚れるというものが主で、痛みは軽度です。そのため無処置ですごしている方も多いようです。肛門周囲膿瘍の治療は膿のたまっている部分にメスをいれて膿をだしてしまふことです。また痔瘻の治療は肛門周囲膿瘍がこの治療によりおさまった後に、できた道を



可及的に切り取ることです。痔瘻はいろいろな状態がありケースバイケースで治療法を考えて行っています。もうひとつ乳幼児の痔瘻について少し触れておきます。乳幼児のものはほとんどすべて男児にみられ、生後三カ月以内が多いようです。また大人と違い何もしないで自然に治ってしまうものも少なくありません。すなわち手術などせずに薬による局所治療だけで良くなってしまうことも多いのです。

③裂肛：排便時の強いいきみ、固い便の通過などによるものが多く、まず肛門の粘膜が縦方向に裂け、そこに細菌が入りこんで潰瘍を形成し、狭窄・みはりいぼを生じていくという病気です。症状としては激しい肛門の痛みで排便後に数時間にわたり持続することも稀ではありません。出血を伴うこともありますが、痔核に比べるとかなり少量です。我慢できない痛



痔瘻

みて来院する方がほとんどです。裂け始めの初期段階では便が柔らかくなるように調整しつつ、軟膏治療で良くなりますが、潰瘍化が進んでしまうと指で肛門を拡張してあげること（用手的肛門拡張術）も必要です。狭窄やみはりいぼが生じるようになると手術療法が必要となります。（方法によっては外来で可能です）なるべく早い時期に病院に一度訪れていただいたほうが良いと思います。

以上肛門の病気について書きましたが、大事なことは、一人で悩んだり勝手に自己診断しないで一度は病院にかかるということだと思います。早期なら手術を回避できることも多いし、痔だと思っていたら実は癌（肛門癌、大腸癌）であったということも少なからずあるからです。